



～ 文化部コーナー ～

六甲おろしの風に乗って  
第 11 回 高取山(その 2)

布引支部 神木 哲男

「雪がちらついているのに意外なほど遠くがよく見えた。厚い雪雲の下面と神戸市との間の空気層の間隙の先に淡路島が見えた。・・・若者は、・・・眼を足もとの神戸市街とそのつづきの海にやった。神戸に生まれて神戸に育っていながら、このたった 320 メートルの高取山の頂上に、こんなすばらしい景観が展開されることをこの瞬間に発見したような気がした。・・・鈴の音がした。若者が立っている高取山の頂上のすぐ下に高取神社がある。鈴が鳴ったのは参詣人があったことになる。・・・間もなく老人がひっそりと足を延ばすような歩き方で山の頂に現れた。・・・今日はじめてこの山へ来たのでないことは明らかであった。若者はその老人はたぶん毎日登山のメンバーの一人ではないかと思った。神戸には多くの山があった。低い山は鉢伏山の 246 メートルから高い山は六甲山の 932 メートルにいたるまで十数峰が並んでいた。その多くは神戸の市内から 1 時間ないし 2 時間で往復できるところにあった。毎日 1 回その山のどれかに登るという習慣的登山は古くから神戸市民の間に行われていた。」(新田次郎「孤高の人」昭和 44 年)

単独行の登山家・加藤文太郎をモデルにした新田次郎の小説の書き出しの部分で、ちょっと長い引用になりましたが、毎日登山のことも書かれているので紹介しました。

加藤文太郎については、ここで改めて紹介するまでもありませんが、明治 38(1905)年、兵庫県美方郡浜坂町(現・新温泉町)で生まれ、神戸の三菱内燃機製作所(現・三菱重工株式会社)に製図修習生として入社、やがて勤めながら神戸市内の山を歩き始め、和田岬の会社の寮から、背山にあたる高取山周辺を自分の庭のように歩き回ったといわれています。そして職場の上司の遠山豊三郎に誘われて「神戸徒歩会」の例会登山に参加し、登山のおもしろさを体得したとされています。「神戸徒歩会」は、明治 43(1910)年、塚本永堯ら 4 名の発起人で「神戸草鞋会」を創立し、大正 2(1913)年に「神戸徒歩会」と改称した神戸の伝統ある登山会であることはいまでもありません。

新田次郎の小説では、文太郎は、高取山に登って海の見えるこの山から日本海に面する故郷・浜坂への望郷の念に駆られたり、同期生たちと呑んでいて急に飛び出して、夜の高取山に一気に駆け上ったりしたことが書かれています。

高取山には、修験の山として猿田彦大神や八幡大神など古事記や日本書紀にその名が記されている多くの神々の祠(神を祀る小さなやしろ)が残されています。猿田彦大神は、二二ギノミコトが日向国(宮崎県)高千穂の峰に降った時にその道案内をつとめ、のち、伊勢国五十鈴川のほとりに鎮座したといわれています。八幡大神は、一般には、応神天皇(第 15 代天皇、4 世紀前半、大和朝廷の興隆期にあたる時代)、神功皇后(応神天皇の母)、比売神を合わせた三神をいい、古来弓矢の神として武人の尊崇があついとされています。高取山は、古代からの日本の歴史の一端を辿ることができるめずらしい山ということができます。

さらに、山野を歩き靈験のある法を身につける修験の場として、「高神の滝」の存在も見逃せません。高神の滝は、今は鳥居の後にある塀でかこまれており、水の流れもわずかになっていますが、昔はここで修験に励む人は、この滝に打たれて修行を積み、悟りを開いたのでしょう。「高神瀧」と書かれた石碑の下に不動明王(煩惱を断ち切り、諸願を達成させる)が、行者の修行をきびしく見守っています。

こうした行者の一時の休み場所、そして今は登山者がくつろぎ、おしゃべりする場所として、「中の茶屋」・「安井茶屋」・「清水茶屋」・「月見茶屋」があり、会員の皆さんの拠り所となっていることはいまでもありません。

加藤文太郎は、まるで修験者のように高取山を駆けめぐり、ここで、「悟り」ならぬ「登山のわざ」を身に付けたのでしょうか。



高神の滝



大灯籠



高取山から見た須磨アルプス

